

修正会（鬼追い会式）

圓教寺では毎年1月18日に「鬼追い会式」とも呼ばれる平和と五穀豊穡を願う祭典が行われる。この特別な日には、守護神役の仮面をつけた演技者が、行列を引き連れて寺院の境内を巡る行進を行う。摩尼殿では行事のクライマックスを迎える。赤鬼は若天という地上の宝の神である毘沙門天（サンスクリット語：ヴァイスラヴァナ）の化身であり、青鬼は乙天という智慧の神である不動明王（サンスクリット語：アカラ）の化身である。若天と乙天の二人は966年に書寫山で性空上人が修行を始めたとき、上人をお助けしたと伝えられている。お寺創建以来、二人は圓教寺の守護神として、千年以上に渡って寺院の伝承や伝統の名物となっている。寺の境内から悪霊を追い払うために二人は協力して働く。彼らの恐ろし気な外見は、「悪霊を追い払い、春を迎える」という悪霊との伝統的な関連から来ているのである。民俗的な風習によると、この儀式は平和や五穀豊穡を願ったものとされている。

祭りの当日、午後1時頃、赤鬼と青鬼は目隠しされて白山権現神社へ導かれる。ここではカラスザンショウで造られた「鬼ノ箸」が配られる。紙のお札で包まれた箸は魔除けの力があると考えられている。若天は片手に鐘を持ち、もう一方には松で作られた長い松明を持っている。背中には紐でつながれた光り輝く木製の槌を背負っている。乙天は木製の黒漆で仕上げられた幅広の剣を握っている。若天を先頭にして、二人の鬼は道に沿って力強く地面を踏みつけ、呪文を唱えながら行列を導き下山する。この一連の流れは「鬼踊り」と呼ばれ、土地神様をなだめ、地震を防ぐと考えられている。

摩尼殿に到着すると、より多くの箸が参詣者に配られ、儀式の踊りが続く。鐘を鳴らしながら、若天は摩尼殿の暗い内部へ劇化された旅の様子で乙天を導く。二人はご本尊の周りを歩き回る。ご本尊は如意輪観音像で毎年この特別な日にだけ櫃が一般に公開される。参詣者はまた、仏法の激烈な守護者である四天王像が見られる貴重な経験が得られる。

2001年以降、地元の梅津家の一族が毎年恒例の祭りに関連する伝統を調整している。毎年1月の初めから、彼らは特別な食べ物を準備し、振付のリハーサルを行い、儀式の服、道具、仮面を修理したり交換したりしている。梅津家の人々は毎年、赤鬼と青鬼の役割を演じる特権を有している。